

私の教科書と税

高野佳穂（鳥取・米子市立湊山中学校）

「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」

学校で配布されるすべての教科書にはこう記述されている。その通り、義務教育である小・中学校の教科書はすべて税金によって作られ、配布されている。私はこの事について印象に残る体験をした。

小学六年生、最後の学習発表会。どんな劇をするのだろうとわくわくしていたが、知らされたのは、教科書無償運動についての人権劇をするということだった。「何それ」というのが正直な感想だったが、練習が始まった。他の皆も考えたことは同じだったのか、最初の演技にはぎこちなさがあった。だが、本番に向けて練習を重ねるうち、セリフを言うとき自分なりに身振り手振りをつけて演技する人が増えていった。ナレーターだった私も、観客に伝わる話し方を試行錯誤した。

教科書無償運動は、部落差別を受けていた人々が憲法二十六条二項にある「義務教育は、これを無償とする」という部分にのっとなって、教科書を無償にするべきだと訴えた運動である。貧しさや権力、反対派の意見など様々な苦労の末に教科書が無償化された。このことに感心し、皆の劇が熱を帯びてくると同時に私は、これまでの教科書の使い方について考えていた。劇に取りかかるまで、教科書のページが少し折れたり破れたりしても私は気にしなかった。友達が落書きしている様子を見ても何も思わなかった。そんな自分を思い出し、何をしていたのだろうと思った。昔は当たり前でなかった教科書を大切にしないのは教科書に込められた人々の思いを踏みにじることだと感じた。そして教科書を大切に扱おうと決めた。

そのうえで迎えた本番は、全員の思いがこもった納得のいくものになったと思う。私にとってあの劇は教科書に対する意識を変えるきっかけとなった。

中学3年生になった今でも、毎年教科書が配布される度にあのことを思い出す。私たち学生ができること、それは教科書が無償化された経験を知り、感謝して学ぶこと。それから、教科書を大切にしながら使いこむこと。せつかく一人一冊ずつもらえるのだから、自分なりの教科書にしていくのがよいと私は思う。大切なのは、私たちの次の世代も等しく勉強ができるように、納税することである。私たちの日常生活は税によって支えられている。このことを忘れずに生活することが今の私たちに必要なのである。私はみんなの生活を守り支えるための納税ができる人になりたい。